
あまてらす訪問記

モノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あまてらす訪問記

【Nコード】

N88920

【作者名】

モノ

【あらすじ】

十七歳の高校生である笠岡笠が家に帰り部屋に入ると、巨大な岩が押入れの前を占拠していた。岩のすきまから顔だけだしたのは天照大神と名乗った礼儀正しくて口の悪い少女だった。

第一話

季節 夏 時間 P M 5 : 3 0 場所 笠岡家 笠岡笠の部屋内部

僕は誰に言うでもなくコレに向かつて呟いた。

「どうすればいいんだよ……これ」

僕の眼前には、本来、押入れと部屋を区切るためのふすまがあるはずなのだが、訳の分からない岩がふすまの代わりと言わんばかりに鎮座している。

もちろん、僕が置いた訳ではない。僕には岩を部屋に置く趣味は無かった。いや、今も無いけど。

今朝にはこんなものは無かったはずだ。というか、こんなものがあつて気づかない方がおかしい。

気づかないとすれば、僕には危機管理能力が他人より圧倒的に欠けているのだろう。なら、一人暮らしをやめて、今すぐ田舎に帰るべきである。

まあ、確かに朝には無かったものだ。いつも通り家を出て、学校へ行き終業式だけすませて家に帰ってきた。

明日から始まる夏休みに胸を躍らせながら家の鍵を開け、自分の部屋に入り、真っ先に目に飛び込んできたのがこの岩だ。

縦四メートル、横四メートルくらいだろうか、立派な岩だが、少々自己主張が強すぎるぞ。天井にめり込んでるし、ふすまは下敷きだ。

とりあえず、警察でいいんだろうか？ こんな経験初めてだから、どこに電話すればいいのか迷う。

いや、警察の前に家に連絡してみようか。何か助けしてくれるかもしれない。

母は家を出る前の僕にこう言った「何かあつたらすぐ電話しなさい。何でも協力するから」

そうだ、いつでも母は僕の味方だった。僕は受話器を取り、番号

を入れた。

ワンコール ツーコール

「もしもし、笠岡です」

母の声だ。僕の疲れた心に優しい雨が降り注ぎ、心の溝にオアシスが出来上がった。

おっと、今は用件を伝えることだけ考えよう。僕は口を開いて、言った

「あ、もしもしお母さん？笠岡けど、僕の部屋の中にでっかい岩があつてさあ『ツー、ツー』……あれ？

オアシスはものの十秒で干からびていった。

「用件を的確に伝えすぎた……。これだと警察に言っても同じだろうなあ」

携帯電話でも持っていれば、写真を撮っていく事もできるんだろうが、あいにく持っていないのでこれはできない。

というか、なんでここに岩があるんだ？ いや、最初に思いつくべきなんだろうけど、混乱していたのでこの考えは出てきてなかった。

誰かが置いていったのだろうか。どうやって？ 大体、部屋に入るための扉は岩が入るほど大きくはない。

「最初から岩があつて学校に行ってる間に急成長した。とか」ありえないことを呟いてみる。

結局、成す術がない。僕一人ではどうにもならない問題だ。明日どうすればいいか考えようという結論でとりあえず自己完結させた。そして「はあ……」とため息をつき、力なく岩を手の甲で二回叩いた。

「はーい」

中から声がした。若い女のものだ。

しばらくすると、岩が少しずれた。天井が嫌な音を立てている。ずれた岩の隙間から女が顔だけ出した。

年はおそらくあまり変わらないだろう。万人受けしそうな可愛ら

しい顔だ。

まあ、今はそんなことは関係ない。法律はよく分らないが、不法侵入とか、器物破損とか、そんな罪なのだろうか。これは迷うことなく警察へ直行してもいいはずだ。

「どちらさまですかー？」

よくそんなことが言えたものだ。いつそのこと、家主だゴラア！と叫んでみたいが、叫ぶだけでは何も変わらないし、敵意があると思われたら、彼女はまた岩を閉じてしまうだろう。そう、クールにいこう。僕はもう十七歳だ。大人とは言わないが、もうまるっきり子供という訳ではない。罪を犯せば罰が与えられる年齢だ。ゆっくり、慎重に、相手に警戒されないように、ゆっくりと話そう。

「どちらさまか聞いてるじゃないですか、さっさと言うてくださいよノロマ！」

「家主だゴラア！」

我慢できませんでした。

そして、岩がゆっくりと閉じられた。

「ふっ、不法侵入ですか！？ 犯罪を生業にしていらっしゃる方ですか！？ どちら様ですか！？」

「不法侵入はお前だ！ 犯罪を生業にした覚えはないし、僕は家主だ！ この岩を入れたのはお前か！？それからどちら様だ！？」

「岩をいれたのは私です。ついでに名前は天照大神です！ 怒鳴らないでください！」

自分が岩を入れたと言っているが、どうやって入れたのだろうとか、名前のこととか色々聞きたいこともあったが、呼吸を整えるために僕はひとつため息をついた。

第一話（後書き）

書いたことがないので書いてみました。ちなみに主人公の名前は笠です かさ。かさおか かさ。上からよんでも下から読んでも、という名前ではないです。それから、不定期更新です。物語が中途半端で作者行方不明ということは避けたいですね。評価が付こうが付くまいができるだけ頑張ろうと思います。・・・まああまりにも駄目なら畳むこともあるかもしれませんが。

第二話

僕は荒れた息を整え、時計に目をやった。PM 7:30
もう二時間もたったのか。気づかなかったな。

夏で日が沈むのが遅いとはいえ、さすがにこの時間ともなるともう暗くなってきている。

とりあえず、現状確認してみよう。僕、笠岡笠が終業式を終え、家に帰り部屋をあけると、巨大な岩があつて、中には罪人がいた。以上

「だれが罪人ですか！」

岩の向こう側から叫び声が聞こえた。

「お前しかいないだろうが！ 大体、地の文を読むな。色々おかしくなるから」

色々あぶなつかしいやつだ。

「地の文くらい読めますよ！ 天照なんですから」

そういえばさっきも言っていたな。天照大神です、って。

「どういう意味だ？ 本名言えよ。あきらかに偽名だろうが」

偽名で神様の名前を出すやつなんてそうはいないと思うが。

「偽名じゃないですよ？ 私の家の人間は太陽を神格化した神である天照大神の血を継いでいると言われています。実際、神通力も使えますからね。あと、家を継ぐのは代々本家の女性です」

天照大神が女の人だったから女性が家を継ぐらしいですよ。と続けて言った。

この巨大な岩を横にずらすくらいのはやっていたので、いまさら神通力の存在を疑うといったことはしない。

「なるほど。ちなみに岩を部屋にいらしたのも神通力か？」

「そうですよー。元は小石なんですけど、押入れに入った後に大きくしました」

部屋に岩があつた謎がとけた。しかし

「天井にめり込むほどの大きさにする必要はなかったよな」

「些細なことです」

「この部屋ごと燃やし尽くして少し火傷させてやりたくなったよ」
それでもいい気がしてきた。切実に。

「死ぬじゃないですか！ 火傷じゃすみませんよ！ のーたりんなんですか！？」

「のーたりん？」

どういう意味だろう。薬品名のようなのだが、聞いたことがない。

「脳足りんって言ったら分かりますか？」

「よく分かった。今灯油と火を持ってくるからちよつと待ってる」

「きゃああああごめんなさいごめんなさい！ 早まらないでくださいー！」

「いやならさっさとそこから出て来い！」

わかりました……。と力ない声が岩の向こうから聞こえたと思うと、巨大な岩が少しずつれて、その隙間から少女が出てきた。

さっき見たときは色々と混乱していたから、あまり気にしてはいなかったが、可愛いらしい女の子だ。

万人受けしそうな小さくおとなしそうな顔に、肩より少し下で揺れている艶やかな黒髪が映える。服は風通しがよさそうな生地ワンピース。

可愛いな。僕でも素直にそう思える。

……それにしても、こんなおとなしそうな女の子が岩の中に閉じこもってたのか。いや、そりゃあ見た目と中身は違うってのは分かるけどさ、こんな子にのろまとかのーたりんとか言われてたのか。まあ、それはもういいとしてなぜ僕の部屋に岩を持ち込んで居座ってたのかを聞かないとな。

そして僕は初めて彼女と目を合わせて話しをした。

第二話（後書き）

二話です！ まだ文章を作るって作業になれませんか。あと服をどう書けば良いのがさっぱり分かりません。研究しときます

第三話

やっと顔を合わせて話し合うことができそうだ。

ずっと岩を挟んで話し続けるというのもおかしい話だからな。

とりあえず自己紹介でもしといた方がいいんだろうか。あちらはもう名前と家のことまで話してくれているんだ。たった一話で。

そう、一話で。

……いや、文句がある訳じゃあないよ？ こちらとしてはありがたい話だ。

伝統的な家の話なんて地雷原みたいなものだからな。

それこそ、伝統的なまでに。

そんなところをじっくり歩き回るなんて正気の沙汰じゃない。

でも、もう少し細かく分けて説明していてもいいと思うんだよ。それはつまり僕が「ちょっと！」

僕は目の前にいる少女、天照大神の声で目が覚めた。どこかにトリップしていたようだ。

彼女は僕に怪訝そうな顔を向けていた。

「どうしたんですか？ ブツブツと気持ち悪いですよ？」

「お前はいちいち人の心をえぐらないとしゃべれないのか」

言葉の端々が心に刺さる

そう、僕は繊細なんだ。

話が進まない気がする。そろそろ気を取り直して自己紹介をしよう。

「僕の名前は笠岡笠、この部屋の窓から学校が見えるだろ？ あそこに通ってる」

「知っていますよ。岩の向こう側からお母さんとの会話が聞こえていましたし、まあ、あれを会話と呼べるのかはわかりませんが」

彼女はしっかり聞いていたらしく、思い出し笑いか、口の端が上がっている。

聞こえていたならさつさと出て来いよ、と言いたかったがいまさら言っても仕方がないので流すことにした。

「それに、もともとあなたに会いに来たんですからね」

名前も知らない人のところに会いに来ませんよ。と言う
なるほど、もつともだ。

まだ話を全部聞いたわけではないが、一応目的があるようで安心した。

見ず知らずの女の子を警察に連れて行って捕まえてくれ、なんてことは言いたくない。世間的な意味で。

でも事前に電話でもしてくれとありがたいなあ。

閑話休題

「それで、僕に会いに来た理由は？」

そう、これが本題。

これを聞けば彼女がわざわざ部屋に岩を置いて押入れに隠れていた理由もわかるのだろう。

「私は天照の名を確かに頂いているんですが、なんというか、仮免のようなものなんです」

「最近の伝統的な家には仮免なんてものがあるのか」

ちよつとぼけてみた。

睨まれた。話の腰を折るなど、その剣呑な目つきが語ってくれる。

こちらも目で返す。

ごめんなさい

頷いた。アイコンタクト成功 友情度アップか？

そんなことを考えている間に彼女は説明を続ける。

「で、正式に名前を頂くには修行として男性の家に二人で助け合つて暮らし、その男性に認められると儀式が受けることが許され、儀式を受けると天照大神という名前が与えられるんです。儀式で名前を与えられるっていうことなので、偽名ではないんですが……称号みたいなものですね、私にも日常生活で使う普通の名前がありますし」

だから市役所に提出する名前の欄は我が家には二つあります、と付け加えた。

家の事情は分かった。

しかし。

「普通の名前があるならそっちを覚えてくれ。これと呼ばし続けるのは少し恥ずかしい。頬を赤らめながらお前の名前を叫ぶ僕はみたくないだろ」

想像してみる。

気持ち悪い。

「随分な言い草ですね。我が家の伝統的な名前ですよ。……まあいいでしょう。これから一緒に暮らすんですしね」

不便でしょうし、と一言

「私の名前は笠岡 天湖です」

第三話（後書き）

三話でした。文が荒い気がします。そろそろ始めてだから。とか言えませんがねえ。精進します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8892o/>

あまてらす訪問記

2010年11月13日22時30分発行